

令和5年度地域づくり人材の養成に関する調査研究会 (第2回) 議事概要

○日時

令和6年1月31日(水) 16時00分～18時00分

○会場

総務省9階902会議室

○出席者

大杉構成員(座長)、小田構成員、吉弘構成員

河井構成員※、加留部構成員※、島田構成員※

※はオンライン出席

(事務局)

棕田企画官、甘利地域支援専門官、手塚企画係長、山田事務官

【議事次第】

(1) 審議

① 調査結果報告

② 論点整理

(2) その他

【議事概要】

調査結果報告

○資料1に関して、「特徴ある地域づくりが行われる地域」の地方公共団体及び地域づくりに取り組む団体等に対し、組織・活動状況、両者の関わり等を把握するため書面による調査を昨年10月27日に実施したこと、また、書面調査を深掘りするために現地あるいはオンラインにより実施したヒアリング調査の結果を事務局より報告。

○資料1の今後の取扱いについて、今回の資料のみという形になるのか、あるいは報告書を作成する際にこれが反映される形になるのか。

→資料1、資料2共に今後の研究会の素材になること、1つ1つの事例が他地域へ横展開していくのに値する事例であることから、報告書で触れていく旨を事務局より回答。

○地域づくり人材の養成において、まさに「人」がキーであり、活動に濃淡はあるが、「何かをよくしていきたい」という思いは、出身、出身外を問わず持っていると感じた。このペー

スとなる資料により調査地域の活動や、様々な悩み、工夫が共有されることで今後いろいろな活動をしていく人にとって一つの共有例になるのではないかと思う。

○地域づくりにおいて人と人との「繋がり」が非常に大事であるということを強く感じた。今でこそ成功している事例でもその過程においては様々なことが起きており、それらは今後地域づくりを行う人にとって大いに参考になるし、ぜひ多くの方に知ってもらいたいと思う。

○今回、「人（個人）」に着目をしようと考えた時に、活動している人の年代によって取組み方に差異があるように思う。10代から50代まで様々な世代背景によってやり方や考え方の特徴が種々あるのではないか。まちづくり、地域づくりはシームレスに世代がずっと繋がりながら進めていくもの。そういう時間軸の中で活動している人の年代がどのようにカテゴライズされていくのか、そういったアプローチの仕方もあるのではないかと感じた。

○「まず個があり、それが中心になっている」というのが共通の感想である。ただ、調査事例についての再現性の可否について、その仕組みや進め方について参考となる部分は何なのかといったことは、もう少し掘り下げて分析しないと分からないというのが正直な思いである。世代については私も感じるどころ、今の若い世代の方法等が本当にはまってしまうのか、時間軸についてはもう少し見ていく必要がある。

○3点意見がある。1点目は、「人に焦点を当てる」ということは非常に大事だが、中核人材が地域活動を開始したきっかけが必ずしも明確ではない。なぜ地域活動に関与するようになったのか明確な形で提示した方が意味があるのではないかと感じた。2点目は、地域活動は皆うまくいっているように聞こえるが、過程においては必ず挫折が存在するはず。それをどのように乗り越えたかが非常に重要。3点目は、「関係人口」という言葉が人によって持つ意味が相違しているため具体的にはどのようなことなのかを明確にする必要がある。

○確かに横展開、再現性をどのようにまとめていくかというのは簡単なことではない。調査事例それぞれが持っている個性や豊かさを人に着目してうまく示せればと思う。そうした意味で、きっかけや挫折した部分に関してもう少し示せれば。また、「中核を担う者」の位置づけについて、ヒアリング対象者のどこに着目したか、相手はどのような立ち位置だったかについて明確にする必要がある。

論点整理

○資料2について、調査研究会が開催された背景、課題（仮説）、論点整理（案）、報告書（案）について事務局より説明。

○論点が非常に多くあるため、何に焦点を当ててアウトプットしていくかについては議論が必要だと感じる。また、私自身、能登半島地震の災害後の支援に深く入っているところ、地域づくりと災害時の強さは本当に連携していると感じており、人との繋がりが非常に重要。この視点が地域づくり人材の養成に入ってくることが今後も重要だと感じた。7つの論点のプライオリティを事務局としてどう考えているか。

→論点7（提案の方向性）が研究会として最終的に導き出したいことであり、そこに至るために論点3（行政の関与のあり方）、論点4（地域づくり等を担うこととなった経緯）、論点5（地域づくりを行う上でのポイント）に着目して議論をしていただきたい旨事務局より回答。

○報告書を読むだけで読者が納得できる、今後の地域づくりのきっかけになりうるガイドのような形になっていると報告書としてより良いまとめ方になるのではないか。

○各委員の皆様がそれぞれ何らかの地域と関わりがあるところ、それぞれにおいてキーとなると感じられている点を共有いただきたい。まず、川崎市の事例では、自然発生的に出てきたものであり、行政が何か施策をやったというより、「場づくり」を行ったことがポイントであった。さぬき市と三豊市では強い個を持ち事業性を持つ人材が地域づくりに関与していたことから「個人かつ事業性」がポイントであったと考えている。したがって、この3事例は行政の関与がそれほど強くなかったという理解である。

○新富町の事例は、企業と行政がこゆ財団を通じて連携したものである。そこに発展していった元手にあったものは、「こゆ財団は、よい意味で人を巻き込むのがうまかった」ということ。また来たくなるようなコミュニケーションを取っており、そういった繋がりをうまく作っていたことがこゆ財団の素晴らしい点である。また行政も「1番チャレンジできる町」を目指し、首長が変わっても一貫してこゆ財団を応援したのが成功した一つの要因と考える。

○北海道のえぞ財団では民間企業の人事担当に財団の人材マネジメントを依頼している。横瀬町のよこらぼでは「ウェルビーイング」を切り口に関係者を呼び話合いの場を設けており、繋がりをうまく活用していることが成功に結びついていると考える。また、三豊市の事例では事業のプロデューサーを担う人物が「自分たちの町を元気にするぞ」という思いを持った地元の事業者をつないでいき、行政主導ではない地元の事業者が主役になるような舞台を整えたことが成功の1つの要因になっていると考える。

○カテゴリー分けについて広域か狭域かという問題ではなく、人の関係性に焦点を当て、地域づくり活動に関与したきっかけが何によって生まれたかで分類すると、ある程度共通したものが見えてくるのではないか。

○調査事例に100%の再現性は無いと考えている。カテゴリーについては「こういう分野であれば、こういった可能性がある」というのが一番良いのではないか。高知市の事例では行政に当初は地元で火を付けていくというところがあったが今ではやりたいことを後押しするところにシフトしており、地域側に対し伴走して寄り添うのが1つのポイントだと考えている。

○事例調査の対象者から伺ったお話を「物語」として捉えたときに、特に「たまたま」という言葉に代表されるような頻出する言葉をピックアップしてみて、そこにどういったものがぶら下がっているかを分析するというのも一つのアプローチの仕方ではないか。

○鶴岡市・酒田市の公益大学の事例では再現性を持たせるために「主催者教育」というアプローチで、主催者として自らが主語となって自分事として地域の中で場を作っていくと行った立ち位置に立ってもらいたいという思いのもと「アドバンスコース」が作られた。長期的な観点で見ると持続出来るかどうかはまだ未知数で、確実な再現性は難しいが、全国的に地域づくりに関する制度・仕組み・プログラムが乱立する中でそれをどのように地域に根付かせていくかを考えることは報告書の中で触れておく必要があるのではないかと思う。

○「再現性」について、再現性が高く見えるものでも小さな偶発性の積み重ねによって固有性が出てくる場合がある。偶発性が高く見えるものでも何らかの枠組みが存在する場合もある。そういったところで「きっかけ」という言葉が出てくるが、どの時点のきっかけを切り取るかというのは難しい。挫折のところをきっかけと捉えられる場合もある。各事例様々なため、そこをうまく整理していただきたい。

○「繋がり」について、他委員ご指摘の事例において、地域づくり活動に興味や関心がない層を活動に巻き込んでも支障がない関係性がなぜ構築されたのかという問題意識は持たなければならぬ。うまくいっていないところもあるはずだが、一定程度出来ているから調査事例として取り上げられるポイントになっている。その点を意識して論点整理をしていただければと思う。

○新富町のこゆ財団の事例では町のコミットメントが非常に高く、制度という観点で言えば、再現性が高い仕組みを作っているが、他地域でこゆ財団のようなことを再現できるかという点で全く出来ないものになっている。ではそれはなぜなのか。こゆ財団は全国の地域商社と違い比較的事業性が有り、関わるメンバーは比較的若く、人の入れ替わりがある。こういった点が何か整理されてきたときに1つのメルクマールとして出てくるのではないか。

○多摩市の事例で若者会議は当初、市の事業として立ち上がった。若者政策の一環として若者会議を立ち上げることは全国で行われているが、運営の仕方には全国の事例ごとに相違がある。MichiLabのような事業者が出てくるケース、行政の仕組みの中でのみ動いているケースに分岐していき、伴走支援に関わる存在等いくつもの要素が生じている。若者会議に関わったア

クターとして行政、伴走支援者、中間支援組織機能を果たした存在等があり、事業として営利性を保持しているか、NPO 的・ボランティア的なものなのか、地域の繋がりの中のみで行っているか、というような分類方法をなるべく客観的に捉えた上で研究会として何が出せるかというのを見ていけると良いと考える。

○これまでの話を伺っていると、仮説としては「再現性不可能な個」が前提として存在しており、「個」を盛り立てるなど、偶発的であろうが「個」を増加させていく。一旦偶発性が存在する前提で制度の仕組みを作っていく必要があるのではと思った。

○マーケティングにおけるカスタマージャーニーのようないわゆるシビックジャーニーの「ジャーニー」の部分を見せることが効果的かもしれない。どこで誰と出会い、どのような形で行政と関わっていったかという部分を抽象化せずにストーリーも具体的に示したシートがあれば、「この中で私が見える部分はここにある」といった発想になり、これから地域づくり活動を行う人にとってなぞれる部分が存在するかもしれない。ストーリーをできる限り具体的に示し、何となくよくあるような言葉を使わない形の仕掛けに大いに意義があると思う。

○様々な御意見をいただいた。我々のとりまとめ方として、一方である程度の類型化を図っていくこと、一方でストーリー性の部分を考えていくことを行き来しつつ考えていく必要があるように思う。片方のみでは報告書の内容が伝わりにくいため、もう少し試行錯誤して報告書のとりまとめを行っていただければ幸い。

以上